

## 剰余価値論以前の搾取論

——『ドイツ・イデオロギー』とサン＝シモン主義——

山口 拓 美

### はじめに

搾取と訳されることが多いドイツ語の Exploitation は、『資本論』の中では、主に第1巻の剰余価値論において重要な役割を演じる語である<sup>1)</sup>。そこでは、「労働力の Exploitationsgrad (搾取度)」が理論的に定式化されるとともに、労働力の資本主義的使用の実態が批判的に描写されている。他方、『資本論』第3巻の地代論には、「地力の Exploitation」という表現が出現する。マルクスはこの表現を用いて、資本主義的農業のネガティブな側面を大工業による労働力の破壊と並べて論じている。

労働力と地力とは、このように、両者とも Exploitation の対象として取り扱われているが、労働価値説を前提とするかぎり、両者の間には解消しえない相違が存在する。すなわち、労働力は剰余価値の源泉であるのに対して、地力は労働しないため剰余価値の源泉にはなりえない、というのがそれである。この相違は、労働力の Exploitation の度合いについては、これを剰余価値率で測定できるのに対して、地力のそれは剰余価値率では測定できない、とも言い表わすことができる。しかし、このような大きな相違があるにもかかわらず、マルクスは両者を同じ Exploitation という概念の対象にしている。このことは、剰余価値の抽出とは別の側面において、「労働力の Exploitation」と「地力の Exploitation」との間に何らかの共通性があることを示している。それでは、「労働力の Exploitation」と「地力の Exploitation」とに共通するのはどのような事態なのであろうか。言い換えれば、剰余価値率の文脈に限定されないところの Exploitation の一般的意味とはどのようなものなのであろうか。

マルクスは Exploitation という語を『資本論』の中で改めて定義するということはしていない。この語は、初期マルクスの時代から頻繁に用いられてきたものであり、さらにはマルクスが用いる以前に、すでに他の論者たちによって使用されていたものである。本稿では、剰余価値論が形成される以前の時期に書かれた諸文献を取り上げ、そこで Exploitation という語がどのような文脈の下で用いられていたのかを検討する。これによって、Exploitation の一般的な意味を究明するとともに、この作業を通じて、「地力の Exploitation」および「自然の Exploitation」という概念が持つ思想史的意義についても論じる。自然破壊が進行し、自然との共生が課題となって

いる今日では、「共生」の対立概念である Exploitation が、自然利用の領域においても主題的に論じられる必要があると思われるからである。

## 1. 『資本論』における Exploitation 概念

Exploitation という用語は、『資本論』全3巻を通じて繰り返し出現し、読む者に強い印象を与える特別な語である。しかしこの語は、可変資本や不変資本のような用語とは異なり、『資本論』の中でその定義が与えられた学術的専門用語ではない。このことは、現行版『資本論』の本文で Exploitation という語が導入される次のような手順を見れば明らかである。

マルクスは、はじめにまず『資本論』第1巻第4章で剰余価値を定義し、第6章で可変資本を定義する。その上で、第7章で剰余価値率を「可変資本にたいする剰余価値の割合<sup>2)</sup>」と定義するとともに、ここからさらに必要労働と剰余労働の概念を導出し、「剰余価値の可変資本にたいする比は剰余労働の必要労働にたいする比と等しい<sup>3)</sup>」と結論する。そして、次のように記す。

「それゆえ、剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の、搾取度 (Exploitationsgrad) の正確な表現である<sup>4)</sup>。」

このような手順において留意されるべきは、次の点である。すなわち、マルクスは「剰余労働の必要労働にたいする比」という概念を慎重に導出した後、直ちにこの概念を、何の追加的説明もなしに、Exploitationsgrad と言い換えている、という点がそれである。つまり、マルクスは Exploitationsgrad という概念を導入する以前の段階で Exploitation という語を定義することはしていないのである。これは、剰余価値を定義した後に剰余価値率を導出した手順とは異なるものである。Exploitation という語がどのような現象を言い当てた語なのかということは、『資本論』の外ですでに了解されており、この了解を前提として、この現象の度合いを測定するための手段として「剰余労働の必要労働にたいする比」が導入されているのである。

とはいえ、Exploitation の定義については、上記引用文にマルクスが付した次のような脚注文の中に、これを求めることが可能であるように見える。

「必要労働が五時間で剰余労働が五時間であれば、搾取度は 100% である。ここでは搾取の大きさ (Die Größe der Exploitation) は五時間ではかられる<sup>5)</sup>。」

ここから、Exploitation の大きさが剰余労働の絶対的長さではかられるのならば、Exploitation とは資本家が労働者に剰余労働をさせることである、と理解することが可能であるように見える。しかしこの操作は、マルクスがまず剰余価値を定義し、その上で剰余価値率の定義へと進んだのとは異なり、読者であるわれわれが労働力の Exploitationsgrad の定義から逆に Exploitation の概念を推測するというものであり、マルクスの意図とは異なる不適切な Exploitation の定義を導いてしまう危険性を孕んでいる。そして実際のところ、Exploitation を「資本家が労働者に剰余労働をさせること」と定義すると、そこから直ちに、以下のような「地力の Exploitation」との不整合の問題が発生する。

『資本論』第3巻の地代論には、しばしば「土地の Exploitation」という語句が出現する<sup>6)</sup>。日本語版『資本論』では、この語句が「土地の利用」と訳されているため、「労働力の Exploitation」——こちらは必ず「労働力の搾取」と訳される——との関連性が背景に退けられている。しかし、次の一節については、どの邦訳者も Exploitation を「搾取」と訳している<sup>7)</sup>。

「どちらの形態においても、土地——共同の永遠の所有としての、交替する人間諸世代の連鎖の譲ることのできない生存および再生産の条件としての土地——の自覚的、合理的な取り扱いの代わりに、地力の搾取 (Exploitation) と浪費が現われる (この搾取 [Exploitation] が、社会的発展の到達水準に依存しないで、個々の生産者たちの偶然的で不均等な事情に依存するということは別として)。小所有においては、このことは、労働の社会的生産力を使用するための諸手段と科学とが欠けていることから起こる。大所有においては、借地農場経営者たちと所有者たちとのできるだけ急速な致富のためにこれらの手段が利用 (Exploitation) されることによって。どちらの場合にも、市場価格への依存によって<sup>8)</sup>。」

この一節において最初に現われる Exploitation は、明らかにネガティブな意味で使用されている。しかもその否定的な意味合いは、「労働力の Exploitation」という場合と同様のものであるように思われる。というのは、この一節のすぐ後には、次のような文が続くからである。

「大工業と大農業とがもともと区別されるのが、大工業はむしろ労働力、それゆえ人間の自然力を荒廃させ破滅させるが、大農業はむしろ直接に土地の自然力を荒廃させ破滅させることであるとすれば、その後の進展においては両者は握手する。というのは、農村でも工業制度は労働者たちを衰弱させ、工業と商業のほうは農業に土地を枯渇させる諸手段を与えるからである<sup>9)</sup>。」

このように、マルクスは「地力の Exploitation」を「労働力の Exploitation」と並ぶ資本主義的大規模生産のネガティブな側面として認識していると考えられる。しかしその際、上で見たように Exploitation の意味内容を「剰余労働をさせること」と規定すると、「地力の Exploitation」は不合理な用語となってしまう。というのは、『資本論』において、労働は人間の労働力の機能であり、価値を形成するのは人間労働だけだからである。地力あるいは「土地の自然力」が労働をして価値を形成するということは、『資本論』では完全に排除されている。価値形成的労働をしない存在者は、剰余労働をすることもできない。それゆえ、地力に剰余労働をさせることはできないのだから、Exploitation の定義の中に、剰余労働や剰余価値を含めると、「地力の Exploitation」という用語は非『資本論』的用語に転落してしまうのである。しかし、上で見たように、「地力の Exploitation」は『資本論』において「労働力の Exploitation」と並べて論じられるほど重要視されている。それゆえ、「地力の Exploitation」の存在を無視しつつ Exploitation の定義を剰余価値率の中に求めるのではなく、むしろ剰余価値率の文脈から一旦離れて、「地力の Exploitation」との整合性を求めつつ Exploitation 概念の意味内容を究明するのが適切であるといえる。それでは、「労働力の Exploitation」と「地力の Exploitation」とに共通する Exploitation の一般的意味とはどのようなものなのであろうか。

すでに見たように、『資本論』においてマルクスは、Exploitation という語を改めて定義してから用いているのではなく、この語についての読者の理解を前提にして、この語を使用している。ということは、この語は当時すでに人口に膾炙していた語であり、マルクスも『資本論』以前からこの語を様々な著作において使用していたことが考えられる。そして言うまでもなく、実際にマルクスはこの語をすでに二十歳台の頃から、すなわち初期マルクスと呼ばれる時代から用いていた。そうであるとすれば、われわれは初期マルクスに属する文献を検討することによって、剰余価値論以前の Exploitation 概念、すなわち剰余価値率の文脈に限定されない Exploitation の一般的な意味を把握することができるかもしれない。そこで次に、初期マルクスに属する、または初期マルクスに関連する諸文献の中に現われるところの Exploitation 概念を研究することにした。

## 2. 「聖マックス」の Exploitation 概念

『資本論』およびそれに関連する草稿類を別とすれば、マルクスおよびエンゲルスの著作物の中で Exploitation という語が最も多く用いられているのは『ドイツ・イデオロギー』の中の「聖マックス」である。それゆえわれわれは、Exploitation の一般的意味の探究を「聖マックス」から始めるのが適当であると考え。

いうまでもなく「聖マックス」は、1845年に刊行されたマックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』を批判する目的で書かれたものであり、『ドイツ・イデオロギー』の中では突出して長大な大作である。『唯一者とその所有』の中で、マックス・シュティルナーは Exploitation を2回 (exploitiert, exploitieren) 使用している<sup>10)</sup>。これに対して、この書物を執拗に論難した「聖マックス」では、マルクスとエンゲルスはこの語を56回以上も用いている<sup>11)</sup>。Exploitation は、彼らがシュティルナーを批判する際のキーワードの1つであり、「聖マックス」全篇にわたってこの語が用いられている。それは、例えば、次のようである。

「聖マックスは『書』の長々しい弁明的注釈を与えるためにこの宗教会議を食いものにし (exploitiert), 『勝手に使い』, または『うまく利用する』<sup>12)</sup>。」

「ここでは彼は、私的所有を所有の概念に転化し、『所有 (アイгентゥム)』と『固有の (アイゲン)』とのあいだの語源的つながりを利用し (exploitiert) て、『固有の』ということばは一つの永遠な真理であると言明し……これを理由にして私的所有の廃止の不可能を根拠づけている<sup>13)</sup>。」

「聖サンチョはたとえば、Geld〔貨幣〕と Geltung〔妥当〕, Vermögen〔資産〕と vermögen〔能う〕等々の語源的連関を利用する (exploitiert)<sup>14)</sup>。」

「もしヘーゲルが、わしはこれほど『月並みな』仕方で聖サンチョによって利用される (exploitiert) ことになるだろうと考慮していたとすれば……！<sup>15)</sup>」

このようにマルクスとエンゲルスは、シュティルナーが自説を展開するために行うところの言葉や文献の処理の仕方、使い方が、Exploitation であると繰り返し述べている。これが彼らによ

るシュティルナー批判の論点の1つである。

次に、シュティルナー自身が Exploitation という語を使用している文に対する彼らのコメントを見てみよう。シュティルナーは『唯一者とその所有』の中で、アダム・スミスの『国富論』を連想させるようなピン工場の労働者を例に取り上げ、次のように述べている。

「その労働は、それ自体としてみれば、無であり、それ自身の内に何の目的もなく、それ自体では何ら完結されることはない。彼は、ただ誰か他人の仕事の助けをするだけであり、この他人によって利用される（搾取される [exploitiert]）だけなのだ。他人に仕えるこの労働者にとっては、教養ある精神の享受などはありようもなく、ただか粗野な快楽があるだけだ<sup>16)</sup>。」

これに対してマルクスとエンゲルスは、上記引用文の2番目の文を引用しつつ、次のようにコメントしている。

「つまりここで『シュティルナー』は、一つの工場の労働者たちは互いの『手中に帰する仕事をする』のだから、彼らは互いに利用〔搾取〕(exploitieren) しあうが、工場主の手はまったく労働しないから、彼はまた労働者たちを搾取する (exploitieren) 立場にもいないのだ、という発見をしているわけだ<sup>17)</sup>。」

彼らは、シュティルナーによるこの「発見」を、新しい搾取理論 (Theorie der Exploitation) だとして擲論している。しかし、われわれが改めてシュティルナーの上記引用文をその前後も含めて素直に読んでみれば、文中の「他人」を「工場主」と解することも可能であり、また、そう解した方が自然に見える。むしろ、この Exploitation を彼らのように作業場内での労働者同士の相互 Exploitation と読み取ることの方が不自然である。それゆえこの部分は、シュティルナーがヘーゲルを Exploitation したように、彼らがシュティルナーを Exploitation した部分だといえるかもしれない。

シュティルナーが Exploitation という語を用いている第2の箇所は、次のようなものである。

「国家はいつでも、私から利益を引きだすこと、つまり、私を喰いものにし (exploitieren) て、搾取し (auszubeuten)、消費すること、だけを狙いとし、しかもこの消費なるものが、Proles〔子孫〕のために私が労すること (プロレタリアート) のみを眼目としているのだとしたら、国家が望むのは要するに、私が『国家の被造物』であるように、ということだけなのだ<sup>18)</sup>。」

これに対するマルクスとエンゲルスのコメントは、この見解が小市民的だというものである。シュティルナーを小市民的と規定するのは、彼の見解を彼らが批判するときのポイントである。この点は、次に見る功利主義批判との関連でより効果的に述べられている。

「聖マックス」において Exploitation という語が最も高密度で出現するのは、「C 道徳、交通、利用説 (Exploitationstheorie)」と題された節である。これはマルクスとエンゲルスによる功利主義思想史の記述が見られる興味深い節であるが、直接には次の文に代表されるところのシュティルナーの見解に対する批判として書かれたものである。

「われら両者は互いに、ただ一つの関係をもつにすぎない。すなわち、有用、利用、利益の関

係だ<sup>19)</sup>。』

シュティルナーのこの文では、使用されている語は *Brauchbarkeit* (有用), *Nutzbarkeit* (利用), *Nutzen* (利益) であって, *Exploitation* は用いられていない。そもそも彼が *Exploitation* を用いたのは、上で見た2箇所だけである。それにもかかわらずマルクスとエンゲルスは、この見解を *Theorie der wechselseitigen Exploitation* (相互利用の理論) と呼び、これをブルジョアジーの思想としての功利説 (*Nützlichkeits-theorie*) の思想史の中に位置付ける。すなわち、彼らによれば「功利説および利用説〔搾取理論〕 (*Nützlichkeits- und Exploitationstheorie*) の前進、そのさまざまな段階は、ブルジョアジーのさまざまな発展の時期とびったりくっついている<sup>20)</sup>」。エルヴェシウスやドルバックの理論が「闘争しているまだ未発展なブルジョアジーに対応して<sup>21)</sup>」いるのに対し、ベンサムやミルの理論は「支配している発展したブルジョアジーに対応している<sup>22)</sup>」のであるが、シュティルナーの理論は「ブルジョアになろうと志している今日のドイツ小市民の表現<sup>23)</sup>」であり、「エルヴェシウスやドルバックがおこなったと同じことをしたのであったにしても、時代錯誤は相変わらずお笑いぐさであろう<sup>24)</sup>」というものである。

彼らは、このように功利主義思想を *Exploitationstheorie* と見なしているが、それではこの場合、*Exploitation* にはどのような意味が与えられているのであろうか。次の文が、この問いに対する極めて明快な答えとなっている。

「いまの場合、この功利関係は一つのまったく明確な意味、すなわち、私は他人に損害を与えることによって自分を利する (人間による人間の搾取 [*exploitation de l'homme par l'homme*]) という意味をもっている<sup>25)</sup>。』

原文は次のようになっている。

“In diesem Falle hat das Nützlichkeitsverhältnis einen ganz bestimmten Sinn, nämlich den, daß ich mir dadurch nütze, daß ich einem Andern Abbruch tue (*exploitation de l'homme par l'homme*)<sup>26)</sup>”

この一文には、本稿の主題にとって重要な2つのポイントが含まれている。1つは *Exploitation* の一般的意味であり、もう1つは *Exploitation* という語が持つフランス社会主義的文脈である。まず前者から見てみよう。

この文では、「私は他人に損害を与えることによって自分を利する」が「人間による人間の *exploitation*」と言い換えられていることから、われわれはここにマルクス自身による *Exploitation* の一般的意味の規定といってよいものを見出すことができる。すなわちそれは、「他者に損害を与えることによって自分を利するような他者の利用」である。*Exploitation* の一般的意味がこのようなものであるとすれば、われわれは「労働力の *Exploitation*」と「地力の *Exploitation*」とを次のように言い表わすことができる。

「労働力の *Exploitation*」とは、労働力に損害を与えることによって自分を利するような労働力の利用のことである。

「地力の Exploitation」とは、地力に損害を与えることによって自分を利するような地力の利用のことである。

これらの文は、労働力および地力の Exploitation についての、簡にして要を得た適切な説明文であると思われる。ただし、これらの文に現われる「損害」が何であるかは追加的な説明が必要である。この点については次節以降で検討することとし、次に、上で挙げた2つ目のポイント、すなわち Exploitation という語にまつわるフランス社会主義的文脈について見ておきたい。

ドイツ語や英語の Exploitation という語は、フランス語の exploitation に由来する語であって、マルクスはこれをフランス語と意識して用いている<sup>27)</sup>。ドイツ語には Ausbeutung という同じような意味を持つ語があるにもかかわらず、マルクスはこのフランス語を好んで用いている。これは、なぜであろうか。恐らくその理由の1つが、上記引用文に現われている exploitation de l'homme par l'homme という語句とこの語句が含まれている書物に対する強い意識である。英訳版『ドイツ・イデオロギー』は、この箇所注を付し、*Doctrine de Saint-Simon. Exposition. Première année.* (『サン・シモンの学説・解義・第一年度』)を見るよう求めている<sup>28)</sup>。Exploitation という語の一般的意味を、その思想的背景とともに明らかにするためには、われわれもこの書物で展開されている exploitation 論を検討しておく必要がある。

### 3. サン・シモン主義の exploitation 概念

『ドイツ・イデオロギー』を構成する諸章の中で、マルクス、エンゲルスの生前に刊行された唯一の部分は、第2巻第4章「カール・グリユン『フランスおよびベルギーにおける社会運動』(ダルムシュタット, 1845年)あるいは真正社会主義の歴史的記述」である。この作品で批判されているのは、フランスの社会主義および共産主義、すなわち、サン・シモン、サン・シモン主義、フーリエ主義、カベー、ブルードン等についてのカール・グリユンによる論評である。その際マルクスは、サン・シモンとサン・シモン主義に関する部分については特に念入りにグリユンを批判している。例えば彼は、グリユンの作品からの引用文の横にローレンツ・シュタインの『現代フランスの社会主義と共産主義』からの引用文を置き、さらにその横に、シュタインが依拠したL. レポーの文をフランス語のまま並べることで、グリユンがいかにシュタインとレポーの章句を書き写したり改竄したりしているかを執拗に暴露している<sup>29)</sup>。またマルクスは、グリユンを批判するに際して、サン・シモンとサン・シモン主義者の著作だけでなく、サン・シモン主義者が発行していた機関誌および機関紙をも用いている。マルクスによれば、グリユンはサン・シモン主義者の雑誌や新聞を知らないで、「グリユン氏にとっては、サン・シモン主義の最も重要な部分、すなわち、現状の批判がまったく脱落してしまう」のであるが、それこそが「経済状態のきわめて詳細かつ重要な批判をふくんでいる」ものなのである<sup>30)</sup>。

グリユンが主として依拠した文献は、上でも言及したシュタインの『現代フランスの社会主義と共産主義』(1842年)である。これは、この種の内容をドイツに紹介し普及させたものとして

思想上重要な位置を占める文献である。われわれの関心事である *exploitation* というフランス語も、この書の中で次のように紹介されている。

「こうして現代の特徴をなす、人間による人間の搾取〔エクスプロワタシオン・ド・ロム・パル・ロム〕、すなわち同じ人間同士による人間の使用が現れる。ここでは敗者は奴隷になる<sup>31)</sup>。]

原文は次のようになっている。

“und damit entsteht der Charakter unserer Gegenwart, die *exploitation de l’homme par l’homme*, die Benutzung des Menschen durch seinen Mitmenschen, in der der Unterworfenen zum Sklaven wird.<sup>32)</sup>”

この文は、サン＝シモン主義の思想内容を紹介する節に現われるものである。サン＝シモンの死後、バザールやアンファンタムらを中心にサン＝シモン主義を標榜するグループが形成され、この思想集団によって『サン＝シモンの学説・解義・第一年度』として刊行されることになる連続講演が、1828年から1829年にかけて行われた<sup>33)</sup>。「人間による人間の搾取 *exploitation de l’homme par l’homme*」という語句は、この連続講演全体を通じて繰り返し出現し、彼らの歴史哲学と社会批判をまとめ上げる中心概念の役割を果たしている。

サン＝シモン主義によれば、これまでの人類の歴史は、人間による人間の *exploitation* が減少していく歴史であった。人間による人間の *exploitation* は奴隷制とともに始まるが、奴隷が農奴に、農奴が労働者に替わるにつれて「人間の物質的活動は次第にその同胞の *exploitation* から方向転換し、ますます地球の *exploitation* に赴いた<sup>34)</sup>」。サン＝シモン主義者は、人間同士の対立が弱まり、人間間の協同が強まっていくところに人類の進歩を見ている。しかしその一方で、あるいは、そうであるが故にこそ、社会の現状に対する彼らの批判は次のように激しいものとなっている。

「われわれが過去の中にもっともむきだしで、もっとも粗野な形態で示した人間による人間の搾取 (*exploitation*)、すなわち奴隷制は所有者と労働者、主人と賃労働者との関係の中にきわめて高度に存続しているのである<sup>35)</sup>。]

「その搾取の強さはともかく、かつて奴隷が搾取されていたのと同じように労働者が物質的、知的そして『道徳的』にも搾取されて (*exploité*) いることを認めるためには、われわれのまわりで起っていることを一目見れば十分である。事実労働者は、自分の労働によってかれ本来の欲望を充たすことがほとんどできないこと、労働することが労働者の意志によるものではないことは明らかである。……貧窮状態に苦しむ労働者が、知的能力や道徳的愛を発展させる時間をもちうるだろうか。……物質的な貧窮はかれを禽獣状態にしてしまい、この状態はさらに新しい貧困の源泉たる頹廢へと導くのである<sup>36)</sup>。]

サン＝シモン主義者によれば、このような「人間による人間の *exploitation*」の前提となっているのは、「所有権の構成<sup>37)</sup>」である。すなわち、労働手段の所有権が家族の内部で相続されるため、「他人におんぶして生活する特権をもった人々<sup>38)</sup>」、すなわち搾取者が再生産される、という



のである。そこでサン＝シモン主義者は、労働手段の相続権を家族から取り上げ、国家に移すことを提唱する。そしてこの労働手段は、それを駆使する能力のある者に配分されるべきであると彼らは主張する。このような分配原理を持った社会は、「普遍的協同社会 association universelle」であり、そこでは「あらゆる人間が、出生の差別なくその才能を可能なかぎり発展させることができる教育を社会から授けられ、社会によってその才能に応じて分類され、その結果働きに応じて報いられる<sup>39)</sup>」ことになる。サン＝シモン主義者は、社会のこのような変革を次のように表現している。

「人間による人間の搾取 (exploitation), これが過去における人間関係の状態であった。人間と手を結んだ人間による自然の開発 (exploitation)こそ未来が示す姿である<sup>40)</sup>。」

原文は次のようになっている。

“*L'exploitation de l'homme par l'homme, voilà, messieurs, l'état des relations humaines dans le passé: l'exploitation de la nature par l'homme associé à l'homme, tel est le tableau que présente l'avenir.*<sup>41)</sup>”

前節で、われわれは次のような問いを立てた。ドイツ語にも *Ausbeutung* という同じような意味を持つ単語があるにもかかわらず、なぜマルクスは *Exploitation* というフランス語からの借用語を用い続けたのであろうか。恐らくこれには複数の理由があると考えられるが、その中の1つが、ここで取り上げている社会主義思想であると思われる。

*exploitation* は、*association* とともに、フランスの社会主義思想を代表する用語である。すでに見たように、マルクスは『資本論』の中で *Exploitation* を改めて理論的に定義するということはしていない。この点で、この用語は剰余価値や可変資本などの純学術的用語とは著しく異っており、こうした用語使用上の相違は、この語の使用に政治思想的な背景があることを示している。というのは、もしも『資本論』が純粋な経済理論書として書かれていたのであれば、その著者は、剰余価値の可変資本に対する比を剰余価値率と呼んだように、剰余労働の必要労働に対する比を剰余労働率と呼んでもよかつたであろうからである。しかし、実際にはこの比率は、剰余労働率といった純学術的名称ではなく、労働力の搾取度という批判的名称を与えられ、しかも元来のドイツ語である *Ausbeutungsgrad* ではなく、フランス語を借用して *Exploitationsgrad* と名付けられた。このため、『資本論』は単なる経済理論書ではなく、社会主義的な色彩を帯びた現状批判の書となった。

『資本論』に繰り返し現われる *Exploitation* という語は、読者にサン＝シモン主義的な社会主義を連想させる<sup>42)</sup>。すなわち、将来社会は人間による人間の *exploitation* のない *association* 的社会であり、そこでは、各人は能力によって分類され働きによって報いられる、という思想を想起させる。マルクスが『資本論』で用いた *Exploitation* という語は、その起源を少なくともサン＝シモン主義思想にまで遡り、サン＝シモン主義的な分配原理を背景として使用されていることは明らかであるように思われる<sup>43)</sup>。そこで、これまでの考察を小括すれば、さしあたり次のように言

うことができるであろう。すなわち、「労働力の Exploitation」と「地力の Exploitation」とに共通する Exploitation の一般的意味とは、「他者に損害を与えることによって自分を利するような他者の利用」であり、Exploitation の概念が労働者に対して適用されるとき、その背景には「能力に応じて働き、働きによって報いられる」というサン＝シモン主義的分配原理が立ち現われる、と。

とはいえ、『資本論』の Exploitation がサン＝シモン主義の exploitation と同一の内容を持つものであるのか否かについては、慎重な検討が必要である。そこで以下の部分では、サン＝シモン主義者とマルクスの exploitation 概念の異同について検討しておきたい。

#### 4. 労働者の Exploitation に関するサン＝シモン主義とマルクスの共通性

前節の引用文中に見られるように、サン＝シモン主義者は、労働者が物質的、知的、道徳的に搾取されている、と主張している。この点については、次のような指摘がある。

「サン＝シモニアンは、こうした階級対立の原因を労働手段を所有するか否かに求める点で、マルクスと類似するが、搾取については、マルクスがのちに使用するよりはもっと広い意味があたえられている<sup>44)</sup>。」

『資本論』のマルクスは、Exploitation の意味をサン＝シモン主義者よりも狭く限定しているといえるであろうか。すでに見たように、マルクスは、exploitation de l'homme par l'homme を「私は他者に損害を与えることによって自分を利する」と言い換えている。この言い方からすると、サン＝シモン主義者の場合、労働者において発生する損害は物質的、知的、道徳的なものであるはずであり、そして実際にも彼らはそのように主張している。それでは、マルクスの場合、労働者において生じる損害とはいかなるものとなるのであろうか。

マルクスが考案した Exploitationsgrad der Arbeitskraft (労働力の搾取度) という指標は、Exploitation (搾取) の大きさを剰余労働の長さで示すものであった。その際、剰余労働が長くなればなるほど資本家が取得する剰余価値は増えるのであるから、資本家において生じる利益が何であるかは明白である。一方、剰余労働が長くなることによって労働者側に生じる損害については、これを剰余価値の取得不可能性だけに見出すことはできないと考えられる。というのは、まず第1に、剰余価値の取得関係だけが問題なのであれば、マルクスは「剰余価値に対する可変資本の比」すなわち剰余価値率を導出した時点で考察を止め、これを Exploitationsgrad と呼ぶことができたであろうからである。しかし実際にはここからさらに「剰余労働に対する必要労働の比」へと考察を進め、これを労働力の Exploitationsgrad と呼んだ。この事実は、マルクスにとって労働力の Exploitation とは、労働力を運動の相において、すなわち時間の相においてとらえたときに問題となる現象であることを示している。それゆえ、Exploitation 関係において労働者側に生じる損害は、剰余価値を取得できないことだけでなく、労働力を必要以上に運動させられること、すなわち長時間労働をさせられることそれ自体をも含むものであると考えられる。また第2

に、マルクスは『資本論』第1巻第7章で Exploitationsgrad の概念を導出した後、続く第8章以下では、長時間労働それ自体が労働者の人間的諸機能を毀損してしまうことを様々な実例によって執拗に例証している。この事実からもやはり、労働者において発生する損害は、剰余価値という金銭的なものだけでなく、剰余労働それ自体によって惹起されるところの人間的諸機能の毀損をも含むものであることがわかる。そして、労働者におけるこうした人間的諸機能の毀損とは、労働者が被る肉体的、知的、道徳的損害から構成されるものである。すなわち、労働は労働者の体力を消耗させるものであり、この労働が長時間に及べば労働者の寿命の縮減や過労死といった現象が生じる。また、先に掲げた引用文の中でサン・シモン主義者も指摘していたように、自由時間は人間の知的、道徳的発展にとっての前提であり、剰余労働時間によってこの前提が失われれば労働者における知的、道徳的発展の不全が生じてしまうことになる。『資本論』の剰余価値論には、このような現象についての実例が詳しく紹介されている。それゆえ、以上のようなことを勘案すれば、マルクスの Exploitation 概念はそれほど狭いものではなく、サン・シモン主義者のそれと同様に、肉体的、知的、道徳的側面をも含むものであるとよいと考えられる。

とはいえ、マルクスによる Exploitationsgrad は、1つの工場が生産した生産物価値全体から剰余価値率を計算し、さらにそれを労働時間に変換することで導出されるものである。つまりマルクスの Exploitationsgrad は、企業の決算書類に基づく抽象的な経営指標のようなものであって、個々の労働者における肉体的、知的、道徳的損害を直接に表わすものではない。このことは、剰余価値率方式とは別の考え方にに基づく Exploitation の指標があってもよいことを示している。例えば、『資本論』第1巻第8章第1節には、1労働日の長さとして労働者としての寿命の長さとの関係が述べられているが、これはもう1つの Exploitationsgrad の測定とよいものである。すなわちそれによれば、1労働日には、「労働力の正常な持続と健全な発達とに合致する<sup>45)</sup>」ような長さというものがあるのであって、この「合理的な労働基準<sup>46)</sup>」を超えて労働者を労働させる場合、それは労働力の単なる利用ではなく、労働力寿命を縮減してしまうところの「略奪」である、というのである。労働力の Exploitationsgrad の把握には、このように「労働力の正常な持続と健全な発達」のための条件を示し、これを基準として個々の労働者の損害をはかるという方式もあってよいと考えられる。現代アメリカの政治哲学者マーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチは、こうした方式の Exploitation 論を展開する際に重要な手掛かりを提供してくれるものである。彼女は、人間が人間として機能しうるために必要な条件を10項目から成るリストにまとめ、これを正義論の基準として用いている。彼女の正義論が主たる考察対象としてきたのは発展途上国の個々の女性であり、元来はこの考察対象に合わせてこのリストも作られた。彼女は「私たちのリストは、女性の扱いが搾取的 (exploitative) であるのかないのかに関して、ある程度のことが言えるところまで導いてくれる<sup>47)</sup>」と述べている。しかしその後、彼女はこれを障害者や動物をめぐる正義論にも拡張している<sup>48)</sup>。われわれは、彼女のケイパビリ

ティ・アプローチをさらに敷衍して、労働者個々人の取り扱いがどの程度 exploitative であるのかを把握するための指標作りにもこれを応用しようとする<sup>49)</sup>。

さて、以上の考察から、Exploitation という語で何を言おうとしていたのかという点については、サン・シモン主義とマルクスとの間にそれほど大きな違いは見られないと言って大過ないと思われる。マルクスは、Exploitation という語の意味を狭く限定したのではなく、Exploitation の度合いを示すための指標を考案したのである。しかし、次の点では、両者の間には看過しえない違いがある。すなわち、サン・シモン主義者が将来社会で行われるべき望ましい行為として「自然の exploitation」を挙げているのに対して、マルクスは「地力の Exploitation」を否定的に捉えている、というのがそれである。地力は土地の自然力のことであり、自然の重要な構成要素である。それゆえマルクスは「自然の exploitation」をサン・シモン主義者とは反対に、望ましくないものと見なしているように読み取れる。次節では、この点を立ち入って考察したい。

## 5. 自然の exploitation に関するサン・シモン主義とマルクスの相違

前節で見たように、人間による人間の exploitation から自然の exploitation へ、というのがサン・シモン主義の主張であった。exploitation という語の元々の意味からすれば、本来この語の対象となるのは土地や鉱山のような自然物である。このため、exploitation の対象として人間そのものが置かれると、それは人間を土地や鉱山のようなものとして利用することを意味し、否定的な意味合いが生じる。一方、人間社会は自然を exploitation することで発展してきたのであるから、人間による人間の exploitation をやめて、人間同士が協同して自然をもっと exploitation すべきであるというサン・シモン主義の主張は自然なものであり、当時においては強い説得力があったと思われる。それゆえ問題とすべきは、なぜマルクスに至ると土地という自然物の exploitation に否定的な意味合いが込められるようになったのか、ということである。

このような変化を考える際、はじめにまず挙げられるべき当然の前提は、1820年代のフランス資本主義の発展段階と、1860年代のイギリス資本主義の発展段階の相違である<sup>50)</sup>。産業革命の初期に位置していた前者に比べ、工業と農業において大規模生産が発達していた後者の社会では、資本主義的な自然の exploitation の帰結をより有利な立場で観察することができたはずである。その上で、自然の exploitation が否定的な意味を持つに至った第1の要因は、言うまでもなく『資本論』における地代論の研究である。そこでは、資本主義的農業の地力略奪的性格が、生産関係の側面から明らかにされている。第2の要因はリービヒから受けた影響である。マルクスは『資本論』でリービヒの『化学の農業および生理学への応用』第7版(1862年、初版は1840年)を取り上げ、「自然科学的見地からする近代的農業の消極的側面の展開は、リービヒの不滅の功績の一つである<sup>51)</sup>」と述べた。このリービヒの著書では、近代農業の地力略奪的性格が、農業生産技術の側面から明らかにされている。自然の exploitation は、直接的には技術的・生産力的問題であるから、ここでわれわれはリービヒの見解に立ち止まって、これをやや立ち入って見

ておく必要がある。

リービヒによれば、地力を構成する土地の有効成分は、有機物質ではなく無機物質であって、これが植物に吸収され、その収穫とともに土地から失われる。それゆえ、地力を維持するためには、失われた無機物質を全て土地に補充しなければならず、従来方式のような厩肥の施用だけでは不十分である。この点で理想的なのは日本の農業であり、そこでは農作物の消費の結果として都市で発生した排泄物が農地に戻され、地力が維持されている。これに対してヨーロッパの農業は地力略奪的であり、「肥料資材を購入せずに、最大量の穀物と肉を市場に運び出す<sup>52)</sup>」ことが目的とされている。「1841年以降のグアノの輸入と施用という偶然の出来事<sup>53)</sup>」のおかげでヨーロッパの農業は人口の増大に対応することができたが、ヨーロッパの外からのグアノの輸入が停止した場合、それは不可能となる。「都市に集積する物質代謝産物<sup>54)</sup>」を水洗便所によって河川に流してしまうのではなく、食料の再生産に用いる必要がある。「農業者の課題は、畑の犠牲において高収量を獲得すること——それは畑の劣悪化を促進する作用しかない——ではなくて、人間社会における利益と同様に畑でも高く、かつ増加を続ける収穫を未来永遠に勝ち取ることにあ<sup>55)</sup>。」

ここでリービヒが主張していることは、ヨーロッパの農業が持続可能なものとはなっていないということである。マルクスが言う近代農業の消極的側面とは、農業のこのような非持続可能性のことであると考えられる。マルクスはこのような農業を「資本主義的農業」と呼び、次のように述べた。

「資本主義的農業のあらゆる進歩は、単に労働者から略奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から略奪する技術における進歩でもあり、一定期間にわたって土地の豊度を増大させるためのあらゆる進歩は、同時に、この豊度の持続的源泉を破壊するための進歩である<sup>56)</sup>。」

サン＝シモン主義者にとって「自然の exploitation」は普遍的協同社会において大々的に行われるべきものであった。彼らは「外的自然の exploitation はもっとも遠い古代にまでも遡るし、産業は未来に留保された発見ではない<sup>57)</sup>」と述べていたように、彼らにとって「自然の exploitation」は過去から未来へと連続するものであり、所有権や分配原理の変化に対応して、それ自身も何らかの性格の変化を経験するといったものではない。これに対してマルクスにおいては、地力という自然的存在者の exploitation が否定的な意味を持つものとなった。両者の間にこのような認識の相違をもたらした要因は、マルクスによる地代論の研究だけでなく、上記のようリービヒの主張に表われているところの生産技術に関する認識の変化である、と考えられる。すなわち、まず第1に、自然科学の進歩によって、地力の構成要素と地力が被る損害を自然科学的に把握することができるようになり、地力の損害が農業の持続不能化を通じて人間社会の存続にとっても損害となることが認識されるようになった。第2に、グアノの大量輸入によって地力略奪的農業の実態が明らかになるとともに、農業の持続可能性のために、農地と都市との物質循環の必

要性が認識されるようになった。第3に、19世紀日本の循環型農業についての調査報告が伝わり、都市と農村との物質循環の現実性が認識されるようになった。1820年代のサン・シモン主義者がこのような認識を共有することは物理的に不可能であったが、1860年代に『資本論』を執筆していたマルクスには可能であった。マルクスにおいて地力という自然の exploitation に否定的な意味が込められたのは、地代論における農業の生産関係の研究に加え、農業をめぐる生産技術の在り方に対する認識について、このように以前とは異なる見解が現われたことによると考えられる。

自然の exploitation に否定的意味が込められたことによって、マルクスにおける将来社会の構想は、サン・シモン主義のような自然の exploitation の拡大に基づくものではなく、次のようなものとなった。

「資本主義的生産様式は、それが大中心地に堆積させる都市人口がますます優勢になるに従って、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と土地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地豊度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する。しかしそれは同時に、あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する<sup>58)</sup>。」

ここには「完全な人間の発展」というサン・シモン主義的な理想が含まれている。しかし、人間と土地とのあいだの関係は、人間が土地の自然力を一方的に犠牲にする方式ではなく、人間と土地との間で物質を循環させる方式、すなわち人間と土地との間で共生的な関係が成立するような方式に再建されなければならないとされている。ここには、生産技術の位置づけについて、サン・シモン主義者との大きな相違が見られる。サン・シモン主義は本質的に産業主義であって、所有権と分配原理の変革は、在来の生産技術を発展させ自然の exploitation を拡大するためのものであった。これに対してマルクスの場合、変革は所有権や分配原理という生産関係だけでなく、生産技術にも及ぶものである。人間による人間の exploitation の廃絶は、人間による自然の exploitation の拡大によってではなく、自然の exploitation を緩和し、自然との共生を図りつつ実現されなければならないのである。サン・シモン主義の目標が自然の exploitation の拡大に基づく普遍的協同社会の実現であったとすれば、マルクスにおけるそれは、自然との関係の変革をも伴った Assoziation であった、ということができると思われる。

## おわりに

本稿では、「労働力の Exploitation」と「地力の Exploitation」とに共通する Exploitation の一般的意味を究明し、その作業の延長上で、「自然の Exploitation」をめぐるサン・シモン主義とマル

クスの相違について検討した。

農業をはじめとした生産活動の多くは、何らかの形で自然の exploitation であり、多かれ少なかれ自然に対して何らかの損害を与える。しかし、自然の側に生じる損害は、それが人間社会に影響を及ぼすものとして把握されなければ、人間社会の側で解決すべき問題として認識されることはない。生産方式の変化とそれに伴う科学的知見の発達によって、自然の側に生じた損害が、人間社会の側へも影響を及ぼすことが把握されたとき、自然の exploitation は否定的な意味を持ち、解決されるべき問題として社会的に認識される。本稿で検討した自然の exploitation をめぐるサン・シモン主義とマルクスとの相違からは、このような一般論を引き出すことができるかもしれない。

19世紀後半以降の実際の歴史の進展においては、「地力の Exploitation」の批判に基づくリービヒやマルクスのような新しい物質循環社会の構想は実現することはなかった。むしろ、サン・シモン主義者の見解、すなわち人間による人間の exploitation の減少と人間による自然の exploitation の拡大が歴史法則であるとする見解の方が、少なくとも西欧社会においては、正しかったように見える。とはいえ、20世紀後半には、自然の exploitation の拡大に対して反対に作用する動き、すなわち、自然の exploitation の度合いを緩和し、自然との共生を図ろうとする動きも実際に見られるようになった。別稿では、こうした動きについて、より具体的な事例に即して論じることとしたい<sup>59)</sup>。

(付記) 本稿は、2009年12月26日に立正大学で行われた研究会「環境フォーラム」と2010年1月21日に神奈川大学で行われた研究会「第35回地域・日本・世界を考える研究会」での報告を基にしている。研究会では出席された先生方から貴重なコメントを賜った。また、大村泉東北大学大学院教授からは別の機会に貴重なご教示を賜った。記して謝意を表したい。

#### 注

- 1) 日本語には Exploitation に対応する一個同一の訳語は存在しない。また「搾取」という語は、必ずしも適切な訳語であるとはいえない。そこで本稿では、ほとんどの場合 Exploitation を原語のまま記すこととした。この点については、山口拓美「Ausbeutung, Exploitation, 搾取——『剰余価値の搾取』は何を意味しているか——」『商経論叢』(神奈川大学)第44巻第3・4合併号, 2009年5月, および本稿の注40), 参照。
- 2) マルクス『資本論』第1巻, 資本論翻訳委員会訳, 上製版, 新日本出版社, 1997年, 367ページ。Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, Erster Band, Buch I: Der Produktionsprozess des Kapitals*, Marx-Engels Werke, Bd. 23, Dietz Verlag Berlin 1962, S. 230.
- 3) 同上, 370ページ。Ebd., S. 231.
- 4) 同上。Ebd., S. 232. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 5) 同上。Ebd. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 6) 例えば, マルクス『資本論』第3巻, 資本論翻訳委員会訳, 上製版, 新日本出版社, 1997年, 1126ページ, 1192-1193ページ, 1315ページ, 1326ページ, 1326-1327ページ, 1353ページ, 1360ページ, 1393ページ。Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, Dritter Band, Buch III: Der Gesamtprozess der kapitalistischen Produktion*, Herausgegeben von Friedrich Engels, Marx-Engels Werke, Bd.

- 25, Dietz Verlag Berlin 1964, S. 650, S. 688, S. 759, S. 765, S. 765, S. 782, S. 785, S. 803.
- 7) 高島素之訳『資本論』第三巻下, 改造社, 1928年, 350ページ, 長谷部文雄訳『資本論』第3部下, エンゲルス編, 世界の大思想 21, 河出書房, 1965年, 296ページ, 岡崎次郎訳『マルクス=エンゲルス全集 第25巻』第2分冊, 大月書店, 1967年, 1040ページ, 向坂逸郎訳『資本論(八)』エンゲルス編, 岩波文庫, 1969年, 327ページ。
- 8) 前掲『資本論』第3巻, 1997年, 1424-1425ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 25, a. a. O., S. 820 f. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。なお, 長谷部文雄訳と向坂逸郎訳では, 引用文中の3番目の Exploitation も「搾取」と訳されている。
- 9) 同上, 1426-1427ページ。Ebd., S. 821.
- 10) ここでは, exploitiert, exploitiieren, Exploiteur, Exploitierenden 等をすべて Exploitation で代表させる。
- 11) [手稿では抹消されているところ]を含めればもっと多くなる。
- 12) 『マルクス=エンゲルス全集第3巻』大月書店, 1963年, 100ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 3, Dietz Verlag Berlin 1958, S. 101. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 13) 同上, 229ページ。Ebd., S. 211. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。また, 引用文中の……は引用者による省略部分。
- 14) 同上, 284ページ。Ebd., S. 258. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 15) 同上, 376ページ。Ebd., S. 337. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。また, 引用文中の……は引用者による省略部分。
- 16) シュテイルナー『唯一者とその所有(上)』片岡啓治訳, 古典文庫, 現代思潮新社, 1967年, 160ページ。Max Stirner, *Der Einzige und sein Eigentum*, Ausführlich kommentierte Studienausgabe, Herausgegeben von Bernd Kast, Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 2009, S. 128. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 17) 前掲『マルクス=エンゲルス全集第3巻』222ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 3, a. a. O., S. 206. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 18) シュテイルナー『唯一者とその所有(下)』片岡啓治訳, 古典文庫, 現代思潮新社, 1968年, 150ページ。Stirner, a. a. O., S. 258f. 引用文中の括弧内のドイツ語は引用者による。
- 19) 同上, 217ページ。Ebd., S. 300.
- 20) 前掲『マルクス=エンゲルス全集第3巻』444ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 3, a. a. O., S. 396.
- 21) 同上, 445ページ。Ebd., S. 397.
- 22) 同上。Ebd.
- 23) 同上, 443ページ。Ebd., S. 395f.
- 24) 同上。Ebd., 395.
- 25) 同上, 442ページ。Ebd., 394.
- 26) Ebd.
- 27) マルクス『賃銀・価格および利潤』長谷部文雄訳, 岩波文庫, 1981年, 87-88ページ。Karl Marx, *Friedrich Engels: Werke, Artikel, Entwürfe, September 1864 bis September 1867*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), I. Abt., Bd. 20, Dietz Verlag Berlin 1992, S. 175.
- 28) *Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 5, Marx and Engels: 1845-47*, Progress Publishers, Moscow, 1976, p. 409.
- 29) 前掲『マルクス=エンゲルス全集第3巻』534-554ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 3, a. a. O., S. 480-498.
- 30) 同上, 548ページ, 550ページ。Ebd., S. 493, S. 495.
- 31) ローレンツ・シュタイン『平等原理と社会主義——今日のフランスにおける社会主義と共産主義』石川三義・石塚正英・柴田隆行訳, 法政大学出版局, 1990年, 234ページ。



- 32) L. Stein, *Der Socialismus und Communismus des heitigen Frankreichs. Ein Beitrag zur Zeitgeschichte*, Leipzig, Otto Wigand, 1842, S. 191.
- 33) サン=シモン主義者の活動とその歴史については、セバスティアン・シャルレティ『サン=シモン主義の歴史 1825-1864』沢崎浩平/小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986年、参照。
- 34) バザールほか『サン=シモン主義宣言——サン=シモンの学説・解義・第一年度, 1828-1829』野地洋行訳、木鐸社、1982年、79ページ。*Doctrine de Saint-Simon. Exposition. Première année. 1829.* Paris, 1830, p. 89. 訳文を引用する際、2つの語を原語に置き換えた。
- 35) 同上、94ページ。*Ibid.*, p. 104. 引用文中の括弧内のフランス語は引用者による。
- 36) 同上、95-96ページ。*Ibid.*, p. 105-106. 引用文中の括弧内のフランス語は引用者による。また、引用文中の……は引用者による省略部分。
- 37) 同上、98ページ。*Ibid.*, p. 108.
- 38) 同上。*Ibid.*
- 39) 同上。*Ibid.*
- 40) 同上、83ページ。*Ibid.*, p. 93. 引用文中の括弧内のフランス語は引用者による。なお、ドイツ語訳 (*Die Lehre Saint-Simons*, Eingeleitet und herausgegeben von Gottfried Salomon-Delatour, Neuwied: Hermann Luchterhand Verlag, 1962, S. 96.) では引用文中の *exploitation* は両方とも *Ausbeutung* と訳されている。フランス語の *exploitation* に対して *Ausbeutung* を対応させることができるドイツ語に比べて、日本語の「搾取」は *exploitation* との意味のズレが大きすぎる。*exploitation* の邦訳語としては、この語を英語式にカタカナ表記したエクスプロイテーションを用いるのが、最も誤解が少なくよいと思われる。
- 41) *Ibid.*
- 42) サン=シモン主義が及ぼした社会主義思想への影響については、F. A. ハイエク『科学による反革命——理性の濫用——』佐藤茂行訳、木鐸社、1992年、参照。
- 43) マルクスのエクスプロイテーション論と分配原理との関係については、松井暁「マルクスと正義」『専修経済学論集』（専修大学）第42巻第2号、2007年12月、参照。ただし、エクスプロイテーション論が、単に「労働に応じた分配」という原理に基づいて資本主義的分配様式を批判するだけのものではないことは、本稿の第4節で論じる。
- 44) 坂本慶一『フランス産業革命思想の形成——サン=シモンとサン=シモン派』未来社、1961年、199頁。
- 45) 前掲『資本論』第1巻、1997年、398ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 23, a. a. O., S. 248.
- 46) 同上。Ebd.
- 47) マーサ C. ススバウム『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳、岩波書店、2005年、193ページ。Martha C. Nussbaum, *Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000, pp. 159-160. 引用文中の括弧内の英語は引用者による。
- 48) Martha C. Nussbaum, *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*, Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 2006.
- 49) 山口拓美「労働力利用の倫理と卓越主義」『商学論集』（福島大学）第75巻第2号、2007年3月、参照。
- 50) 19世紀のフランス社会主義とその経済的背景については、中川弘「アソシアシオン論研究序説——第一部・初期社会主義についての覚え書——」『商学論集』（福島大学）第70巻第4号、2002年3月、参照。
- 51) 前掲『資本論』第1巻、1997年、865ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 23, a. a. O., S. 529.
- 52) リービヒ『化学の農業および生理学への応用』吉田武彦訳、北海道大学出版会、2007年、72ページ。Justus von Liebig, *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie, 7. Auflage, Erster Theil: Der chemische Proceß der Ernährung der Vegetabilien*, Braunschweig: Druck und Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1862, S. 112. 邦訳は第9版を底本としており、マルクスが用いた第7版とは異なる

が、マルクスが参照を求めた「農耕の自然法則への緒論」は第7版と第9版で同一である。よって本文で引用した邦訳文には、第7版の中に、対応するドイツ語原文がある。

53) 同上, 76 ページ。Ebd., S. 120.

54) 同上, 90 ページ。Ebd., S. 141.

55) 同上, 9-10 ページ。Ebd., S. 11f.

56) 前掲『資本論』第1巻, 1997年, 864 ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 23, a. a. O., S. 529.

57) 前掲『サン-シモン主義宣言』83-84 ページ。Doctrines de Saint-Simon, *op. cit.*, p. 93. 引用する際, 語を1つ原語に置き換えた。

58) 前掲『資本論』第1巻, 1997年, 863-864 ページ。Marx-Engels Werke, Bd. 23, a. a. O., S. 528.

59) さしあたり, 山口拓美「政治経済学的概念としての動物資本について」研究年報『経済学』(東北大学)第64巻第4号, 2003年3月, および山口拓美「EU アニマルウェルフェア政策の思想的背景について——功利主義と perfectionism——」『商経論叢』(神奈川大学)第43巻第3・4合併号, 2008年3月, 参照。ここでは, 農業分野における家畜のエクспロイトーションについて論じた。